

秋草学園短期大学 紀要 36 号 (2019)

[論文]

## 与謝野寛・晶子と市民スポーツの父平沼亮三との関り

小清水 裕子

Relationship between Hiroshi Yosano, Akiko and Ryozo Hiranuma ,father of citizen sports

Yuko Koshimizu

キーワード：与謝野寛、与謝野鉄幹、与謝野晶子、平沼亮三、市民スポーツ、平和を求める指向  
明星、冬柏、書簡

Key Words : Hiroshi Yosano, Tekkan Yosano, Akiko Yosano, Ryozo Hiranuma,father of  
citizen sports,Direction of Peace, Myojo, Tohaku, Letter

要約：与謝野寛（鉄幹）・晶子と市民スポーツの父、平沼亮三の関りについての文学的な関りについては未だ明らかにされてこなかった。また、与謝野寛・晶子が平沼亮三に宛てた書簡（新資料）の翻刻も行われていなかった。そこでまずは直接的な関りを示す書簡の翻刻を行い、その内容を明らかにし、考察を加えた。また、与謝野夫妻と平沼亮三との関りを示す新聞記事や、雑誌記事、寛と晶子の短歌作品によって、文学的な関りを明らかにした。また、平沼家の所蔵する半切に毛筆で書かれた与謝野晶子直筆の短歌作品(新資料)について考察を加えた。

## 与謝野寛（鉄幹）・晶子と市民スポーツの父・平沼亮三との関り

### はじめに

与謝野寛・晶子は昭和五年に雑誌「明星」の後継となる雑誌「冬柏」を発刊した。この「冬柏」は「明星」廃刊後に横浜貿易新報の紙上で「冬柏短歌会」として与謝野寛・晶子の活動が続けられたことによって成立したもので、その活動の拠点は、横浜が中心であり、この横浜での活動を支えた一人が平沼亮三であった。しかし、現在まで与謝野夫妻と平沼亮三との関りが指摘されて研究されたことはなかった。

本稿では、与謝野夫妻と平沼亮三の関りを、新資料である与謝野夫妻が平沼亮三に宛てた書簡や、新聞記事、平沼家の所蔵する新資料から検証し論じたい。また、平沼亮三は平和の祭典であるオリンピックの自身の参加と招致でも有名であるが、平沼亮三と与謝野夫妻の希求した平和への視座の共通を見出し、与謝野夫妻と平沼亮三の平和を求める指向についても指摘したい。

### 一、平沼亮三について

まず、平沼亮三について紹介する。その名字である「平沼」は横浜市西区の地名となっている姓である。この「平沼」という地名については「(横浜市) 西区の地名のあゆみ」<sup>i</sup>で以下の通り説明されている。

天保 10 年 (1839) の頃に常陸鹿島神宮の神官だったという五代目平沼九兵衛 (生没年未詳)、長男の六代目平沼九兵衛 (? -1907)、七代目平沼九兵衛が沼地を埋め立て平沼新田と名付けた。明治 6 年 1 月に平沼新田のうちで町並みの整った所に、平沼町を新設した。明治 34 年に横浜市に編入し、～中略～町名は埋立者の姓「平沼」を採った。～中略～北西側を東海道本線、横須賀線、相鉄本線が通り、平沼橋駅がある。～中略～平沼九兵衛が平沼新田の鎮守として創建した平沼神社がある。(昭和 41 年 5 月 1 日設置、住居表示)

このように現在の横浜の中心部の干拓事業をきっかけとして、平沼氏は以降、政財界に通じるようになった。そこに誕生したのが平沼亮三である。

平沼亮三 (写真 1) は平沼氏の七代目九兵衛とその妻千代の長男として明治一二年二月二十五日誕生した。豊かな家庭環境に恵まれ、大邸宅に住まい、慶応大学幼稚舎から大学に進

み、福沢諭吉の門弟として信頼を得ていた。そして、この慶応大学時代にスポーツ方面での活躍が際立ち、数々のスポーツの振興のために重責を担い続けた。特にオリンピックに対しての思い入れは強く、自身も昭和七年第一〇回のロサンゼルスオリンピックとベルリンオリンピックに選手団団長として参加している。平沼亮三は特に日本にオリンピックを招致するために世界に向けて尽力していたことは有名である。また、市民スポーツの父として、スポーツの分野で初めて文化勲章を授与（昭和三〇年）されたことは当時耳目を集めた。更にスポーツ以外にも議員としてまた横浜市長として長年公に尽くした人物である。

神奈川県横浜市にある三ツ沢公園の競技場の隣には平沼亮三を顕彰してつくられた「横浜市平沼記念体育館」もあり、今なお市民のスポーツ振興に関りを持ち続けている。また、三ツ沢公園の中には平沼亮三を顕彰した、平沼亮三が昭和三十年の第十回国民体育大会の時に当時七十五歳にして立派に走る姿の銅像（写真2）と、平沼亮三の走る姿に感銘を受けた昭和天皇の御製歌の碑がある。

まず、銅像（写真2）の基台の裏面にある小泉信三の記した「記」は、簡潔に平沼亮三の事績などが述べられているので引用する。

平沼亮三君ハ横浜ノ人 市民トシテ生き、市長トシテ逝く（昭和三四年二月十三日享年七十九） ソノ貴族院及ビ衆議院議員トシテ国政ニ参与シ 土地ノ開発 各種会社事業等ノ為ニ貢献シタ実績ハ殆ド一々数エ難ク 更ニ有ラユル運動競技ヲ自ラ体験シ 又ソノ凡テノ奨励者 援助者トシテ力ノ限りヲ尽シタ功勞ハ東西絶エテソノ比ヲ見ヌトコロデアツタ 君ノ平生活淡酒脱 公ヲ先ニシ私ヲ後ニシ 常ニ与フルコトヲ以ツテ受クルオリモ幸イトスルコト終生変ラズソノ人望並ブモノノナカッタコトハ コレ素ヨリ当然ノミ 今此処ニ聖火ヲ掲ゲテ走ルモノハ単ニ一個ノスポーツマンデナク 真ニ有道高德ノ人ノ姿トイウベキデアロウ

昭和三十七年十月三十一日 後進 小泉信三

財界人として著名な小泉信三は平沼亮三と共に慶応大学で福沢諭吉の弟子として学び、平沼亮三を慕う後輩の一人である。小泉信三の「記」では「公共のために世の中に尽くした」「人望に厚かった」平沼亮三の姿が述べられている。

次に、昭和天皇の御製歌の歌碑は前述の昭和三十年の国民体育大会において、七十五歳にしてトーチをかかげて立派に走る平沼亮三の姿に感動して

松の火をかさして走る老人のおおしき姿見まもりにけり

と、詠んだものである。御製歌の「老人（おいびと）」は平沼亮三であり、その走る姿が「雄々しい」だったので、思わず「見まも」ったことが表されている。このように天皇の御製歌に

特定の人物が詠まれることは珍しいので、当時はかなり注目された。



写真1 平沼亮三（大正14年）



写真2 三ツ沢公園の銅像

## 二、平沼亮三宛て与謝野寛・晶子書簡から

前述した平沼亮三を顕彰した横浜市平沼記念体育館には（神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢町）に二通の与謝野夫妻（与謝野寛と晶子）の書簡が展示されている。この書簡は平沼家が所蔵するものを横浜市平沼記念体育館で展示・公開している。書簡が存在するのであるから、平沼亮三と与謝野夫妻は何らかの関係があったと理解し、体育館で展示していたものの、現在まで書簡を翻刻し、調査・研究がなされていなかった。また、現在平沼亮三の孫にあたる平沼泰三氏に確認したところ、与謝野夫妻との関係について、平沼亮三及びその妻婦美からの直言は得られていないし、親戚にも知る者はいないとのことである。

それでは以下に二通の書簡を翻刻しその内容を明らかにする。便宜的に、大正時の書簡を①とし、昭和（推定）時の書簡を②とする。また、①は封筒があるが、②は封筒がない。

### ① 大正十二年十月七日 （毛筆）

#### 《封筒》

表 横濱市、平沼町

平沼亮三様 御侍史

裏 東京、麹町区、富士見町 五ノ九

与謝野 寛

晶子

#### 《書簡》 寛筆 卷子

肅啓

お手紙を拝して驚き入りました。

母君とお子様たちと乳母なる人とは同時に災厄の悲しい犠牲と遊ばしたことハ、何たる苛

酷なる事実でせう。御心中をご想像申上げてハ、お慰めやうの無い絶大の御悲痛に私共の心さへ寒き涙に濡れ通ります。

右様の御事とハ存ぜずお手昏を頂くまでご弔詞も申上げず失礼を致しました。

その御悲歎のなかで、公生活のために百方御配慮なされ、猶私共にまでも御返事を御書き下されましたことを感謝致します。参上してぢきぢきおくやミを申上げたいのですが、交通も込み合ふと承り、また御妨げにもなろうかと存じ、勝手ながら書上を以て哀悼の心だけを捧げます。

奥様の御悲しみハどんなでせうと、お噂申上げてをります。何とぞよろしくお傳へくださいまし。

私共の事をもお尋ね下さいましたが、あなた様がたの御災厄に比べますと、全く被害のなかつた人間の部類です。

公私につけて御繁忙の御事と察し上げますが、秋冷の加ります季節に御自愛を祈上げます。

艸々拝具。

十月七日

与謝野寛

晶子

平沼亮三様

頓首

この書簡は関東大震災で平沼家が被災してしまい、平沼亮三の四女由良（七歳）と四男八郎（五歳）とばあやのサクと女中のテイが梁の下敷きになり亡くなったことと、平沼亮三の妻婦美の母も婦美の横浜市保土ヶ谷の実家で被災して亡くなってしまったことを悼んでいるものである。平沼亮三は「震災余話」<sup>ii</sup>の中で、震災の時には当時専務を務めていた東京会館にいて被災し、交通機関が絶たれ混乱する中、品川から横浜まで「ランニングで」自宅に帰り着いたのは十二時過ぎで、既に家は焼け落ち、「家内の母始め子供ら、家族のうち四人死んで、子供が二人重傷を負っていた」と記している。また、松本興はこの時の平沼亮三のことを「二人の愛児の変わり果てた姿を目の当たりにしたとき、平沼は思わず取りすがって声を上げて男泣きに泣いた」<sup>iii</sup>と記している。

書簡中に「お手昏を拝して驚き入りました」「右様の御事とハ存ぜずお手昏を頂くまでご弔詞も申上げず失礼を致しました」とあるように、平沼亮三からの書簡により、与謝野寛・晶子は平沼家の惨状を初めて知ったことが理解できる。残念ながら、平沼亮三から与謝野夫妻に宛てた手紙は発見されていないので、その内容を確認することはできないが、震災によって、家族の不幸を与謝野夫妻に報告する内容であったことは理解できる。

また、「御悲歎のなかで、公生活のために百方御配慮なされ、」「公私につけて御繁忙の

御事と察し上げます」は、平沼亮三が失意の中、それにも負けずに、公的な機関の復興に心血を注いでいることが述べられている。前掲の小泉信三の「記」の「公ヲ先ニシ私ヲ後ニシ」と同様である。その一つの例として、大正十二年十月八日「横浜市日報」に「復興運動」常務員会の一員として平沼亮三の名があげられていることである。また、この時には文化財保護として三溪園の修復などを進めていたことが知られている。

書簡の最後に「あなた様がたの御災厄に比べますと、全く被害のなかつた人間の部類です」と記されている。しかし晶子は脱稿も間もなくの源氏物語の現代語訳の原稿が文化学院に置いてあったために灰燼に帰したという非常につらい出来事があった。しかし、家族の命に別状はなかったことは何にも代えがたく、何よりも安堵したことであった。大正十四年にアルスより刊行された晶子の二十番目の歌集『瑠璃光』に関東大震災の歌がある。その中で、我が子の無事を喜び

露深き草の中にて粥たうぶ地震に死なざるいみじき我子

「露深い草の中で我が子は粥を口にしているが、（それでもよかったではないか）地震で死ななかつた愛おしい我が子よ」と、詠んでいる。この状況は平沼亮三の家族とは対照的である。それ故に書簡の「奥様の御悲しみハどんなでせうと、お噂申上げてをります。何とぞよろしくお傳へくださいまし」と、我子と母を同時に失った、平沼婦美の深い悲しみに寄り添おうとする気持ちが強く表れていると考えられる。

② 年不詳 (推定・昭和四年) 三月十四日 (毛筆)

《書簡》 晶子筆 卷子

啓上

御健かに入らせられ賀上候。

さて、御高書を忝く存じ申候。

御迷惑と存候へども、発起人におなり下され候やう 私よりも願上候。皆様の御厚意につき、私も辞退いたさぬことに仕り候。まことにく恐入候へども、よろしく願上候。

猶また、このたびの私の作文教科書につき、御配慮を頂き、御禮申上候 書肆の中の處によれば、横濱の女学校長氏へ、今一度あなた様より、お電話にてお頼み被下候やう、私よりお願いしてくれと申し候。御多忙の中ニ恐入候へども、校長またハ国語の主任へよろしく御一言を願上候。

奥様へおよろしくお傳へ被下度候。

艸々拝具

三月十四日

晶子

平沼様 御もとに

平沼亮三からの書簡の返信である。しかし、平沼亮三が晶子に宛てた書簡は発見されていない。書簡の内容は、平沼亮三が晶子の五十の誕生会（冬柏亭を贈る）発起人になることへの謝意と、晶子の著した作文の教科書への配慮のお礼を述べているものである。

これは現在は封筒の無い書簡となっているため、「三月十四日」と月日のみしか確認できないものであるが、内容から判断して、昭和四年三月十四と推定する。

推定の鍵となるのが、「発起人」と「作文の教科書」の限定である。

まず、平沼亮三が発起人となる晶子に関わる催事について考察を進める。ここで、差出人が①の書簡では与謝野寛と晶子の連名であったのに対し、②は晶子のみであることに注目したい。つまり平沼亮三が引き受けた発起人は与謝野夫婦二人に関わる何らかの催しではなく、晶子単独の催しと推定される。昭和四年に晶子が主役となった催しで最大かつ重要なものは十二月二十二日の晶子の五十の祝いである。この晶子の五十の祝いは非常に盛大に催され、晶子が祝いとして贈られた品もけた外れのものであった。「冬柏亭」と名付けられた書斎である。昭和二年に与謝野夫妻は長男光と次男秀の住む荻窪に引っ越した。そこに増築する形で「冬柏亭」と名付けられた晶子の書斎が建てられたのである。

この盛大な晶子の五十の祝いは当時、世間の注目を集め、新聞でも連日報道された。

- ・十二月十七日「東京朝日新聞」夕刊 2面

「歌人晶子女史 五十の祝い 来たる廿五日 東京会館で 近しい人々の集ひ」

- ・十二月二十二日「横浜貿易新報」1面

「感謝の言葉 與謝野晶子」

- ・十二月二十三日「東京朝日新聞」朝刊7面

「祝ひの集ひに歌人の感涙 晶子女史を囲んで 文壇にまれな昨夜の盛宴」

今年五十を迎えた歌人與謝野晶子女史の賀宴が二十二日午後五時から丸之内東京會館で催された。泉州堺の一文学少女時代より明治、大正、昭和を通じて我が文壇に残した女史の足跡は實に華やかで大きかつただけに同夜集まつた顔ぶれも有島生馬、石井柏亭、徳田秋聲、堺利彦、野口米次郎、久保田万太郎、入沢幸吉、徳富蘇峰、斎藤茂吉、埴原久和代、馬場胡蝶、平沼亮三の諸氏を始めあらゆる方面の人々をまぜてざつと二百五十名といふ盛大さ…

以上のように一週間もの間、写真付きで報道がなされたのである。そしてこの中で特に注目するのは二百五十人の盛会の顔ぶれの中で平沼亮三の名が紙上に紹介されていることである。さらに昭和二年に終刊となった大正期に復活した雑誌「明星」に代わって昭和五年三月に雑誌「冬柏」が発刊された。この記念すべき第一巻第一号の「冬柏」の巻頭に平野万里の「刊行の辞」があり、「冬柏」が発刊に至った経緯が述べられている。それによると晶

子の五十の祝いの徳富猪一郎（徳富蘇峰）のスピーチで「明星」休刊を「遺憾」として、「著者と読者との間を永年結びつけて居た親しむべき絆をこの際何とかして繋ぐ」ことを求めたことがきっかけとなったことがわかる。また、晶子が贈られた書斎「冬柏亭」にちなんで雑誌の名前も「冬柏」となったことが示されている。

一方、巻末の「消息」欄には、新詩社同人の田中悌六によって五十の祝いの報告がされている。その中に徳富猪一郎の他にもスピーチをした人物が明らかにされている。

八時に食堂が開かれた。デセエルに入り石井柏亭氏の挨拶に続いて徳富猪一郎先生、平沼亮三氏、木下奎太郎氏、深尾須磨子、久布白落実、石本静枝三女史、新居格氏、森田草平氏等のテエブルスピーチがあつた。

ここでも平沼亮三の名があげられている。しかも、スピーチの順番からして、大変高位に座していることがわかる。

以上のことから、晶子の五十の祝いと平沼亮三の関りは深く、平沼亮三がある一定の役割を担っていたと考えられ、②の書簡でいうところの「発起人」は晶子の五十の祝いの発起人であったと推測できる。ちなみにこの会場となった「東京會館」は平沼亮三が役員を務めていた。前述したが、関東大震災に被災した時に平沼亮三は東京會館で仕事をしていたため、ランニングで横浜まで帰宅したのであった。恐らく、会場となった東京會館に対しても平沼亮三は何らかの形でかかわったものと推測される。

次に、「作文の教科書」は晶子が差出人であることから晶子の著作に関わるものと推測される。晶子の著作で「作文の教科書」に当たるものは昭和四年の晶子の『女子作文新講』があげられる。晶子は昭和四年二月に國風閣より『女子作文新講』の刊行を開始した。その後も『女子作文新講』は昭和六年四月まで継続して全六冊刊行した。そしてこの書籍の販売の拡充のため、昭和四年三月六日に小林政治宛ての与謝野寛書簡<sup>iv</sup>に「先日願上候「女子作文新講」のことよろしく各校へ御高配願上候」の一文があり、「女子作文新講」編纂の趣旨や採用のお願いが書かれた印刷物が添えられている。その印刷物には

さて突然ながら、茲に私の近く脱稿致し候「女子作文新講」四冊を、書肆「國風閣」より発行致し候につき、取敢へず製本の出来候「巻一」と、その「参考書」とを貴覧に入れ候。御教務のお忙しきなかに甚だ恐れ入り候へども、御一讀下され、幸に思召にかなひ候はば、御校の國語科に於て、作文教科書、若くは副讀本として御採用を賜はり候やう願ひ上げ候。

とあり、この教科書の採用をお願いするものである。平沼亮三に宛てた書簡と教科書の採用という点で依頼内容も一致するものである。さらに、三月十五日、白仁秋津宛に寛・晶子の



連名の書簡<sup>v</sup>には、

このたび出版致候女子作文新講（全四冊、一年生より四年生まで）の見本を差出候。何卒御地の女学校にて、来たる四月より採用せられ候やう、可然御配慮を願上候。各女学校へハ既に見本を差出し候へども、多数の教師につき、大兄よりも見本を示して御依頼願上候。

とある。平沼亮三宛ての書簡とはわずか一日違いであり、内容も似通っていることから、同時期に記されたもので、この書簡を昭和四年三月十四日と推定することができる。

以上のことから②の書簡は、晶子の五十の誕生会で発起人となることが既に昭和四年三月十四日以前に内定し、その誕生日のお祝いの品が晶子の書斎「冬柏亭」とし、準備が進められていること、また、晶子の著書の『女子作文新講』の販売に対し平沼亮三はこの書簡以前に、何らかの形で協力をしていたこと、また、晶子は平沼亮三をさらに頼って『女子作文新講』の販売の拡充を図っていたと理解できる。

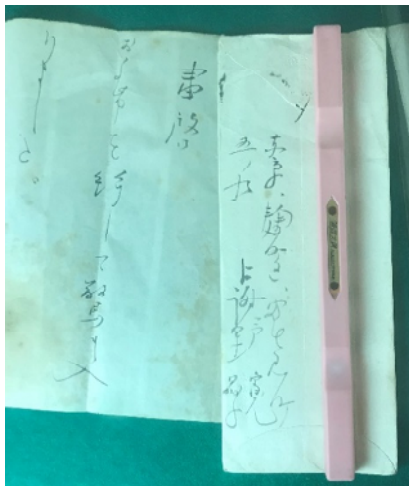


写真 3 平沼亮三宛与謝野寛晶子書簡

### 三、冬柏會詠草から

大正期に復活した「明星」は関東大震災で一時中断したが、その後復活し刊行が続行した。しかし、財政面からも継続が叶わず、昭和二年に終刊を迎えた。その後しばらくは与謝野夫妻の主宰する新詩社からは雑誌が刊行されることはなかった。昭和五年三月に前年に催された晶子の五十の祝いをきっかけにして雑誌「冬柏」が発刊に至ったことについては前述のとおりである。従って、与謝野夫妻が自分たちの雑誌を持つことができなかった、昭和二年から五年にかけての約三年間に、晶子が評論や短歌の連載を積極的に行っていた場のひとつに「横浜貿易新報」があげられる。

昭和三年四月より開始された「冬柏會」の詠草は昭和三年四月より毎月「横浜貿易新報」に紹介されることとなったのである。その「冬柏會」第二回が開催された場所が平沼亮三の横浜市沢渡の自邸であった。関東大震災で被災し、新たに居所を沢渡に求め、昭和二年に新邸が完成した。その新邸で昭和三年五月一日に開催された第二回「冬柏會」は、ちょうど五月五日から与謝野夫妻が満鉄（南満州鉄道株式会社）の招きで一か月程度、中国東北部を中心に訪れる直前であった。この平沼新邸での「冬柏會」については「横浜貿易新報」の五月九日と十日の二日間にわたって記事と詠草が紹介された。両日とも小タイトルに「平沼氏邸小集雑詠」と添えられていることは注目すべきである。五月九日は寛の十二首と平野万里の七首を始め当日の様子などが記事となっている。また、十日には晶子の九首と新居格の二首が掲載されている。

#### 《五月九日》「冬柏會詠草（一）」平沼氏邸小集雑詠

冬柏會の第二回小集は與謝野先生夫妻の渡支送別を兼ねて五月一日午後三時から青木町澤渡なる平沼亮三氏の新邸で開きました。松の木立や若楓山吹などに騒いで居た風も収まると静かな雨の宵となつて蛙の聲がそこはかとなく聞こえて来ました。平沼氏夫妻の心からなるもてなしに一同歓談に時を移し十一時近くに漸く散會いたしました。當日の參會者は先生夫妻と令息令嬢新居格平野万里小野哲郎氏夫妻三宅代議士夫人石崎一恵夫人内山英保関戸信二の諸氏（佐藤生）

##### ○ 與謝野 寛

さくら散る春の別れを惜むとて風荒木き日も高き野を行く  
 丘の家松にまじればおのづから柱とみゆる松のむら立ち  
 丘の上松と若葉の遠に見る港の水の青き夕ぐれ  
 この窓よ松高くして心をば丘より更に天に行かしむ  
 倚りて愛づ松のみ高く立つ窓に遠き岬と海の一はし  
 軒ちかき松の木立のかなたには丘かたぶきて澄める青空  
 大氣なる主人と共におのづから清く秀でし松のむら立  
 丘の空おぐらくなりて静かにもがらすを透す松の影かな  
 丘の木のとそがれ初めてほのかなる蛙の聲も夕風の底  
 先づ踏むは少女の像の聞き入れる泉の前の第一の階  
 葱の花葱の色する壺にさし哀れに清き心なるかな  
 新しき家の木の香を嗅ぎながら丘の若葉の風に吹かるゝ

#### 《五月十日》「冬柏會詠草（二）」平沼氏邸小集雑詠

##### 与謝野晶子

若葉もえ五月の天の曇れるがきはやかにする山松の幹

初夏の大氣に人も雑林も浴むと覚ゆさわたりの溪  
 神奈川のさわたりに見る初夏の海には黒き船のみぞある  
 さわたりの皐月の空よ日のうちは曇り夕は水色となる  
 嵐ふき平らかならぬ心もて皐月があるもをかしき夕  
 武蔵野の沼袋をば忘れずと若き夫人の語る初夏  
 本牧の岬も船も小さけれど山かへでほど風に騒がず  
 野をへだて神の御弟子の学校のしら壁見ゆれ初夏の岡  
 暮ゆくや晴れもはてざる趣に自ら耽る初夏の空

まず、この平沼新邸での冬柏會歌会の開催については前掲の横浜貿易新報の記載の通りであるが、昭和三年五月一日の平沼亮三の手帳を見ると、午後四時に晶子がやってきたことが書き留められている<sup>vi</sup>。そしてこの日の歌会の参会者の顔ぶれは豪勢である。横浜貿易新報の記事に「先生夫妻と令息令嬢新居格平野万里小野哲郎氏夫妻三宅代議士夫人石崎一恵夫人内山英保関戸信二の諸氏」とある通り、与謝野夫妻と平沼亮三の家族に加え、評論家で教授の新居格、新詩社を担う平野万里、三井財閥の小野哲郎夫妻、代議士で横浜貿易新報社長の三宅馨の夫人、そして財界人として活躍する内山英保が参会している。財界、政界、教育界、文学界からの一流のメンバーが一堂に会しているのである。これは、平沼亮三が自邸に与謝野夫妻を招くにあたり、それにふさわしいメンバーを招いたものと思われる。なぜなら、この日の歌会は、単なる冬柏會の歌会ではなく、与謝野夫妻が四日後に満鉄に招待された満蒙旅行のはなむけの会を兼ねているからである。従って、その前途を寿ぐにふさわしい人選が平沼亮三によってなされたと考えられる。

また、この当時、雑誌を持たない与謝野夫妻にとっては横浜貿易新報を拠点とした冬柏會の活動は重要な活動の一つであった。平沼亮三をはじめ、与謝野夫妻や、夫妻の運営する新詩社の助けとなる人脈を求めるのは与謝野夫妻にとって必至であった。この点からも、平沼亮三の新邸での冬柏會の歌会は与謝野夫妻にとっては喜ばしいものであったはずである。

さて、平沼新邸で開催された歌会は夕刻前から夜まで続いた。従って、与謝野寛・晶子の詠んだ歌には、日暮れ前から夜に至るまでの情景が表現されている。寛の「さくら散る春の別れを惜むとて風荒木き日も高き野を行く」の通り、まだ日も高いところに平沼邸に向かい、寛の「丘の上松と若葉の遠に見る港の水の青き夕ぐれ」および晶子の「さわたりの皐月の空よ日のうちは曇り夕は水色となる」では、青や水色と見える夕刻の港の風景が詠まれている。このように小高い横浜港を望める丘の上に建つ平沼新邸は、自然豊かな松の林や山林、池を擁していた。そこで、寛と晶子の短歌に共通して「松」「丘」「岡」の語が繰り返し用いられている。そして自然豊かな夕刻の景物として「蛙のなき声」を歌に用いている。寛の「丘の木のとそがれ初めてほのかなる蛙の聲も夕風の底」や、晶子はこの詠草にはあげていないが、「東京朝日新聞」の昭和三年五月三十日に「わが五月」と題した七首中の一首に「神奈川の

沢渡溪に聞きし夜の蛙三日して荻窪に鳴く」と詠んでいる。晶子は満蒙の旅に発つ前夜、荻窪の自宅で蛙の声を聞き、沢渡の平沼邸を思い出したのである。

また、平沼新邸は当時には珍しく、靴を履いて生活する西洋式のスタイルの家で、「そのためなのか、第二次世界大戦終戦後には一時はアメリカ軍に接収された」<sup>vii</sup>との後日談もある。この西洋風の様子は、寛の「先づ踏むは少女の像の聞き入れる泉の前の第一の階」によく表れている。新邸の一階には、噴水を有するエントランスがあり、西洋の少女像が飾られていたことが詠まれたものである。

さらにこの西洋風の新邸には鉄棒やテニスコートをはじめ、様々なスポーツが出来る施設が整っていた。日本にオリンピックを誘致することに熱い志を持っていた平沼亮三は、昭和十一年に日本に IOC 会長のラトゥール氏を招き、この沢渡の自邸で手厚くもてなした。日本では世界の近代スポーツを存分に楽しむことができることや、スポーツを愛好する市民の一則面を見せたのであった。<sup>viii</sup>



写真4 沢渡の家でくつろぐ平沼亮三

#### 四、平沼家所蔵の晶子揮毫作品から

平沼家には晶子直筆の半切の掛け軸が二本ある。一本は晶子の第十九歌集『流星の道』（大正十三五月十五日 新潮社刊）の、

人住まぬ島にも似たる清らなる白き椿と思ひけるかな

もう一本は第二十歌集『瑠璃光』（大正十四年一月 アルス刊）の、

去る雲も枕さだめて寝る雲もあてに振舞ふ富士の夕ぐれ

である。後者は平沼亮三が雲海に浮かぶ富士山の画を描いたものに、晶子が短歌を書き付けたものである。（写真5・6）



写真6 写真5拡大

写真5 画・平沼亮三 歌・与謝野晶子

平沼亮三の富士の画に晶子が「去る雲も…」と詠んだ作品は平沼亮三の雅号「召水」の落款とともに「昭和丁卯春」とある。またの桐の函の内側に「昭和二丁卯春」とある（平沼亮三が書いたと思われる<sup>ix)</sup>）ことから、この作品が昭和二年に完成したものと推察される。このことから、沢渡に新郎が完成したことを記念して平沼亮三が晶子に揮毫を依頼したのではないと思われる。平沼亮三が雲海に浮かぶ富士山の画を描き、晶子が後から歌を書き入れたものと思われる。

一方、「人住まぬ島にも似たる清らなる白き椿と思ひけるかな」は、歌に詠まれている「白き椿」から椿を示す「冬柏」が想起される。与謝野光（与謝野寛と晶子の長男）は昭和四年一二月二二日に開かれた晶子の五十の祝いの会を回想した「椿の花」<sup>x)</sup>に

昭和四年の十二月に、母の五十の誕辰を祝う会がありましてね、椿の賀というんです。母は特に椿が好きというわけではなかったけど、十二月から咲くけなげな花ですしね、皆さんがその日のために「椿に寄する賀歌」というのを作って祝って下さったんです。

と述べている。昭和三年五月一日に沢渡の平沼新郎で開催された「冬柏會」にしても、昭和四年十二月二十二日の晶子の五十の祝い＝椿の賀にしても、その表された花は椿である。従って、平沼亮三にとって、与謝野晶子といえば想起されるのは椿なのである。

つまり、晶子に短歌の揮毫を求めるにあたり、自身と作品と何らかの関り、または自身の思い入れを投影させた一品を欲するのが自然であろう。この点から「人住まぬ…」の短歌が「椿」を題材にした歌であることから、晶子の五十の祝いと深く関わった平沼亮三が求めてしかるべき作品であったと思われる。

## 五、与謝野夫妻と平沼亮三

平沼亮三と与謝野夫妻が知り合ったいきさつについては、現在、確かな記録も存在せず、平沼家からもその証言が得られていない。しかし恐らく、大正八年四月より与謝野寛が慶應義塾大学の文学部講師として着任したことが何らかのきっかけとなってお互いを知り合ったものと考えられている。先にも述べたが、平沼亮三は福沢諭吉の門弟として深く慶應義塾大学に関わっていたことから、寛と慶應大学の学内で何らかの接点があったものと思われる。

また、現存する書簡はたった二通のみであるが、大正十二年の書簡①においては既に与謝野夫妻は平沼亮三の家族をよく知っていることや、表面的に弔辞を述べるに過ぎない内容の書簡ではないことから大正十二年には既に旧知で、しかもある程度親しい関係にあったと推測される。大正八年から十二年の期間の中で大正十二年十月には両社の一定の関係性が成り立っていたのである。また、与謝野夫妻の長男である光は慶應大学医学部を大正十五年に修了し、その後同大学医学部で助手を務めたことも平沼亮三との接点を探る今後の一助になると思われる。

さて先に述べたが、昭和三年五月に満鉄（南満州鉄道株式会社）の招きにより「満蒙の旅」に与謝野夫妻が出かけた。この旅行は与謝野寛と晶子の共著『満蒙遊記』にまとめられ、昭和五年五月に刊行された。与謝野寛はこの著書の巻頭言において

日本人が先史時代から永久の未来に亘り、いろいろの意味で交渉の最も深い隣国の現状について、余りにも迂闊であるのは愧かしい事である。

個人と個人、民族と民族の心からの親善融和は、唯物主義と強権主義の外の問題である。それは相互の抽象的議論に由ることでもない。何よりも愛と趣味に和らげられた気分感情の交響に由つて培養し実現せらるべき問題である。

と、平和を希求することを述べている。このように相互理解による平和を求めるコスモポリタンの与謝野夫妻の指向は、明治四十四年に寛が、翌明治四十五年に晶子が欧州に渡り、世界を体感し、世界の中の日本を客観的に見つめる経験から得られたものも多い。この様に広く世界を見ようとする視座は、日本に市民スポーツという概念が存在しなかった時代に、誰よりも早く、広く世界を見てオリンピックを日本へ招致しようと奔走した平沼亮三の視座に通うものがある。与謝野夫妻は特に文芸や教育という分野で、その実践を具体化しようとした。一例として大正十年に西村伊作らと「自由で独創性のある学校教育」「感受豊かな人間教育」「男女平等の教育」を掲げて文化学院創設に関わり、文化学院での授業も行ってい

た。与謝野夫妻が文芸や教育のフィールドで平和を求める指向は平沼亮三が世界を広く見る視座を持っているからこそ理解ができ共感したのではないかと思われる。また一方、平沼亮三が関東大震災後に社会の復興に滅私で公に尽くしたことに、与謝野夫妻は強く共感していたものと思われる。つまり、世界を広く見、平和を求める指向によって与謝野夫妻と平沼亮三は互いに惹き付け合ったのではないだろうか。単に慶応義塾大学で何らかの接点があったとしても、その後、心からの家族ぐるみの付き合いに発展するには、お互いに通じ合う指向は欠くことができない。このような点からも、平沼亮三と与謝野夫妻の関わり合いは生じてしかるべきであったと思われる。

最後に平沼亮三はスポーツだけではなく、広く文芸にも関わろうとしていた。その実践の一例が「去る雲の…」に見られた自ら描いた日本画であり、短歌会の参会であり、与謝野夫妻をはじめとした、文芸の世界・芸術家たちとの関りであった。第二次世界大戦の打撃により、三溪園が再び存続の危機に面した時には、横浜市長の立場でその文化財を保護する活動を積極的に行ったことも一例である。

平沼亮三が昭和三十四年二月十三日に没した際に、第八回文展（大正三年）で入選を果たした画家、西田武雄（半峰）から弔意を示す葉書が遺族に届けられた。（写真 7）



写真 7 西田半峰葉書

このような半峰からの少し洒落のきいた葉書を受け取る度量が生前の平沼亮三には備わっていたのであろう。広く世界を見つめ、平和を求める指向を崩さずに、新しい時代を創造して行く点において、平沼亮三の生き方はと与謝野寛・晶子の生き方は重なるところが多いのである。

#### 「注」

i 横浜市ホームページ

ii 平沼亮三『スポーツ生活六十年』慶応出版社 昭和十八年七月二十日

iii 松本興『聖火をかかげてスポーツ市長・平沼亮三伝』聖火をかかげて刊行会 一九六三年

- 
- iv 植田安也子・逸見久美編『天眠文庫蔵 與謝野寛晶子書簡集』 八木書店 昭和五八年六月七日
- v 逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成第二卷』 八木書店 二〇〇一年七月二〇日
- vi 慶応義塾大学福澤研究センター所蔵
- vii 平沼泰三氏・談
- viii 平沼泰三氏・談
- ix 平沼泰三氏・談
- x 与謝野光『晶子と寛の思い出』 思文閣出版 平成三年九月一日

写真 1・4・5・6・7 平沼家所蔵

「参考文献」

- 逸見久美ほか編『鉄幹晶子全集』 一卷～三二巻、別巻一～六 勉誠出版
- 逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子 明治篇』 八木書店 二〇〇七年八月三〇日
- 逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子 大正篇』 八木書店 二〇〇九年八月三〇日
- 逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子 昭和篇』 八木書店 二〇一二年八月二五日
- 太田登『与謝野寛晶子論考』 八木書店 二〇一三年五月二九日
- 赤塚行雄『女をかし与謝野晶子 横浜貿易新報の時代』 神奈川新聞社 一九九六年一月七日
- 小清水裕子『歌人古宇田清平の研究—与謝野寛・晶子との関り—』 鼎書房 二〇一四年六月三〇日
- 川崎キヌ子『満州の歌と風土』 おうふう 二〇〇六年三月十九日

「協力」

- 平沼泰三氏（平沼家）
- 都倉武之氏（慶応義塾大学 福澤研究センター）
- 廣田康博氏（横浜市平沼記念体育館）
- 砂川恵一氏（神奈川スポーツセンター）
- 牟田正弘氏（NPO 法人横浜シティガイド協会）